

道徳

生徒と教師が共に、よりよい生き方を考える「特別の教科道徳」を目指します

道徳部は、「道徳性を養うために、課題を自分事として捉え、自他の考えを多面的・多角的に捉え直し、聴き合い語り合う学びを通して、よりよい生き方を考える」生徒を目指して研究を推進してきました。

私たちは、「深い学びの姿」を目指し、手立てを検証してきました。生徒は、多様な視点から自分の考えを捉え直し、よりよい生き方を考えるようになってきました。



県中教研 道徳部 全県部長
新発田市立七葉中学校

校長 野澤 一吉

深い学びに至る授業を構想するポイント

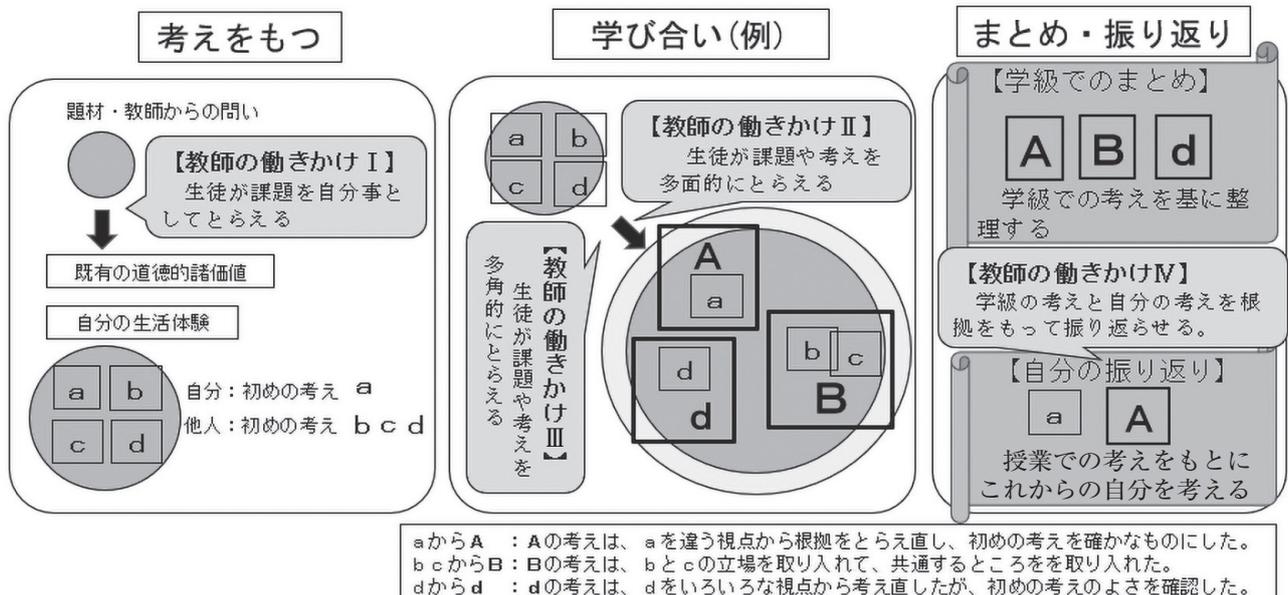
生徒に課題を自分事にさせるには、教師からの問いに、生徒が捉えていた道徳的価値と生活体験などを関連させることが大切です（【教師の働きかけⅠ】）。課題を解決するために自分の考えを確かめたいという意欲をもたせたいです。

生徒の初めの考えを、学び合いにより、比較検討させながら、その根拠や捉えていた道徳的価値を再考させます。ポイントは、生徒の考えや授業のねらいから多面的・多角的な視点を設定し、他の考えを聴き自分を語らせ

ることです（【教師の働きかけⅡ・Ⅲ】）。生徒に、その視点から、自分たちの考えの妥当性や有効性、互いの考えの関連などを検討させます。

※多面的・多角的な視点により、生徒の視野が広がり、個が成長し、学級の道徳性が成熟すると考えます。

終わりに、学級での考えをある視点から関連させ整理し、広がりや深まりをまとめます。そして、生徒個々に、自分の考えの変化や捉え直した点を含めて、自身の道徳的価値について振り返らせます（【教師の働きかけⅣ】）。



【上越】自分の考えを多面的・多角的にとらえさせる発問により道徳的価値を深めさせる。

上越地区の研究は、深い学びの姿を、生徒が視点を広げたり変えたりして、



表層から深層に至る意見が交わされ、自分の考えを整理できている姿としている。

その手立てとして、主発問と補助発問などの内容と構成や、生徒の考えの変化や強化されたことを意識させる有効な思考ツールなどを開発している。

生徒の振り返りから深い学びに至ったかを分析することにより、よりよい発問構成や意見交流の方法について研究してきた。

【新潟】学び合いの場面で考えを視覚化し視点を明らかにさせて最適解と納得解に導く。

新潟地区の研究は、深い学びの姿を、教材、先哲、他者及び自己との対話を



を通して、課題の理解や多様な考えを共有しながら、最適解と納得解を導く姿としている。

その手立てとして、思考ツールやICTの活用を工夫しながら思考を可視化し、多面的・多角的な視点による対話により、考えが深まる過程を研究している。

まとめとして、妥当性などを学級で検討して最適解を導き、振り返りとして、自己との対話により納得解に至る学習過程について研究を推進してきた。

【中越】題材に応じて、役割演技と教師の問い返しにより道徳的価値を深めさせる。

中越地区の研究は、深い学びの姿を、生徒が実感的な理解を伴いながら、多面的・多角的な見方・考え方によって道徳的価値をとらえている姿としている。



その手立てとして、体験的な学習場面では役割演技により課題を自分事としてとらえさせることと、問題解決的な学習場面では有効な発問や問い返しについて研究している。

特に、課題を自分事とする段階での役割演技により、生徒が多面的・多角的にとらえに発展する学習過程についての研究を推進してきた。

【下越】教材の中心課題を追究し、考えを深めさせる補助発問により質の高い振り返りに導く。

下越地区の研究は、深い学びの姿を、課題を多面的・多角的に考えさせて、自分の考えの変容を自覚し、その内容を具体的にまとめる姿としている。



その手立てとして、生徒自身が道徳的価値の理解を深めるために、多面的・多角的に考えることができる教材の選定と中心課題及び補助発問の中身についての研究を進めている。

普段の道徳授業から、振り返りの場面を大切に授業を実践しており、生徒が自分の考えをまとめる質の向上に重点を置き実践研究を積み重ねてきた。

道徳 重点目標

- 1 校長の方針の下、道徳教育推進教師が中心となり、各校の実態を考慮して、重点目標を設定するなどして、道徳教育の全体計画及び年間指導計画を作成する。
- 2 自分事としての課題になるように、道徳的諸価値を基にして、生徒の考えやこれまでの生き方を確認させるなどの働きかけを工夫する。
- 3 考え、議論させるために、多面的・多角的な視点からの重層的な発問や体験的な学習などを取り入れ、「自分を語る」授業を展開する。
ア 登場人物への自我関与中心の学習 イ 生きる上で出会う課題に対する問題解決的な学習
ウ 道徳的行為に関する体験的な学習
- 4 授業者は、道徳の内容項目及び題材について、これまでの道徳的諸価値を再考するなどして、自らの価値観を深める。

道徳 <上越地区・上越市中教研>

「わたしのせいじゃない」

研究主題：自分の考えをもち、進んで考えを伝え合い、
深い学びを得る生徒の育成 ～発問構成の工夫と対話の充実で、「深い学び」を促す～

開催日：11月29日（火）

会場校：上越市立板倉中学校

公開：1学級

授業者：2年 鶴巻 華恵

指導者：上越教育大学大学院 教授 早川 裕隆 様



研究推進責任者
上越市立直江津中学校
安藤 正人



会場校教科担当者
上越市立板倉中学校
高井 瑞樹

こんな深い学びの姿を目指します

「自分の考えを明確にし、その考えを伝え合う」→「相手の考えを傾聴し、話し合おう活動の中で、教材について多面的・多角的に捉える」→「教師の主発問・補助発問を受け、自分の考えをさらに深めていく」→「振り返りの自己内対話を通して、価値観を再構築する」。その一連の姿を「深い学びの姿」として捉え、その姿が見られることを目指します。そのために、考える必然性をもった「ねらい」を練り上げ、「ねらい」に迫るために必要不可欠な主発問や補助発問（切り返しの発問）を想定します。

深い学びにいたるポイント

ポイント1

複数教員による「ねらい」の練り上げ

明確な指導の意図（指導観）をもって授業に臨むために、複数教員による授業検討を行う。

事前の生徒の価値観を共有し、ねらいを明確にし、「深い学び」の姿を確認する。さらに、「深い学び」に至るために、「自分との関わりで考えてみたくなる発問構成（主発問・補助発問）」「多面的・多角的に考えられる対話の工夫」について、検討する。

複数教員で検討することで、一人では気付くことのできない視点を得ることができ、生徒の学びの主体者としての自覚を促し、深い学びへ導くことができる。

ポイント2

発問構成（主発問・補助発問）の工夫

価値観の差異に注目し、「自分事として考えてみたくなる主発問・補助発問の工夫」を通して、生徒の問題意識を生み出し、授業のゴールを共有することで教師と生徒の学び合う関係を構築する。

ポイント3

振り返りの工夫

どの対話（対教材・他者・自己）を通して価値観の再構築（深い学び）がなされたかを振り返り、その過程を認知することで自己内対話を促し、当事者意識をもった道徳的価値観を追求する姿を促し、行動の変容を期待したい。

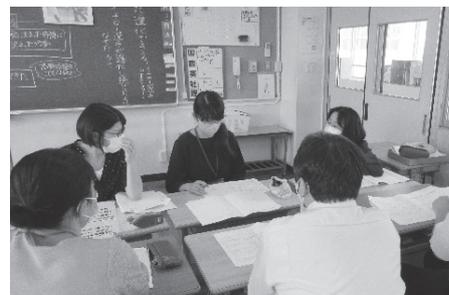
単元(題材)の様子

ポイント1

「考え、議論する道徳」の授業を実現するためには、多様な指導方法の工夫がある。どのような指導方法を取り入れるのか、そして、生徒に何を学ばせたいのか、「ねらい」を十分に検討する必要がある。



深く考えることのできる分かりやすい発問から、「ねらい」に近づく生徒の発言を「線」でつなぎ、その「線」が学級全体の「面」となるよう、教師がコーディネートするため、複数教員による指導案検討を通した「ねらい」の練り上げが重要と考えた。

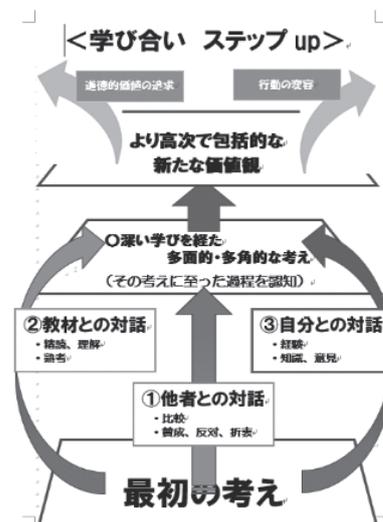


ポイント2

「深い学び」が得られるよう、取り上げる内容項目(題材)から生徒の問題意識をどのように掘り起こすか検討し、自分事として考えてみたくなる発問の設定を通して、生徒の課題意識を喚起する。

ポイント3

道徳的判断の難しさを考える対話や、道徳的価値を見出す対話をもたらす葛藤場面を経て、自らの価値観を問い直す。授業の終わりに、その過程を振り返り、意識化することで、新たな見方や考え方を再構築できるような工夫に取り組んだ。



研究会

「わたしのせいじゃないーせきにんについてー」は、いじめの状況と、責任のなすりつけあい描かれた絵本である。泣いている男の子を前に、登場人物たちがそれぞれの立場でさまざまな言い訳をしている。いじめの積極的な加害者でもなく、無関心であったり消極的であったりすることがいじめを助長させていること、また、それが社会で起きている様々な問題にも関連していることに気付かせたい。

そのために、自分との関わりで考えさせる主発問・補助発問から問題意識や「人間としての生き方」の深まりを生み出し、起こりえる様々な場面において、道徳的行為を選択し、道徳的価値を実現しようとする判断力を養うために、その理由や根拠を出し合い、比較し合う対話の中で、価値観の再構築(深い学び)を促したい。

<授業構成のイメージ>

教材名:「わたしのせいじゃない」
(内容項目C 公正, 公平, 社会主義)

「自分事として捉えさせる
主発問・補助発問」

自己内対話を促す対話の充実

価値観の再構築 (深い学び)

道徳 <中越地区・魚沼市中教研>

「二通の手紙」

研究主題：道徳授業における「質の高い多様な指導方法の具現化を目指して」～役割演技，問い返し発問の実践～

開催日：11月16日（水）
会場校：魚沼市立広神中学校
公開：1学級
授業者：3年 橋本 哲明
指導者：上越教育大学・上廣道徳教育アカデミー 特任教授 小宮 健 様
魚沼市教育センター 統括指導主事 新澤 美和子 様



研究推進責任者
魚沼市立湯之谷中学校
渋谷 祐樹



会場校教科担当者
魚沼市立広神中学校
橋本 哲明

こんな深い学びの姿を目指します

道徳授業の質的転換のためには、質の高い多様な指導方法の確立が求められています。文部科学省による報告の中には質の高い多様な指導方法として、「①読み物教材の登場人物への自我関与が中心の学習」「②問題解決的な学習」「③道徳的行為に関する体験的な学習」が示されています。その中の③に関連し、役割演技を用いた指導方法と深い学び、道徳諸価値の理解を深め、様々な課題や問題を主体的に解決する生徒の姿を目指します。

深い学びにいたるポイント

ポイント1

役割演技を通じた体験的な学習

役割演技は「筋書きのないドラマ」です。演者は自分の道徳的判断力や心情をもとに、他者と対話をします。互いに心を揺り動かされるようすを、学級全体で共有します。このことによって、道徳的行為に関する体験的な学習を深めていくことができます。また、役割演技で取り上げた「問題」について他者との対話や自己内対話を通して、道徳的価値を実感的に理解することができます。

ポイント2

問い返し，切り返し発問をする

生徒の発言や意見は、直観的、反射的であることが多いです。多面的・多角的な思考を促すためには、その発言の根拠を「問い返す」ことが効果的です。その考えに至った経緯を丁寧に「振り返る」ことで、多様でより深い考えを引き出すことができます。

ポイント3

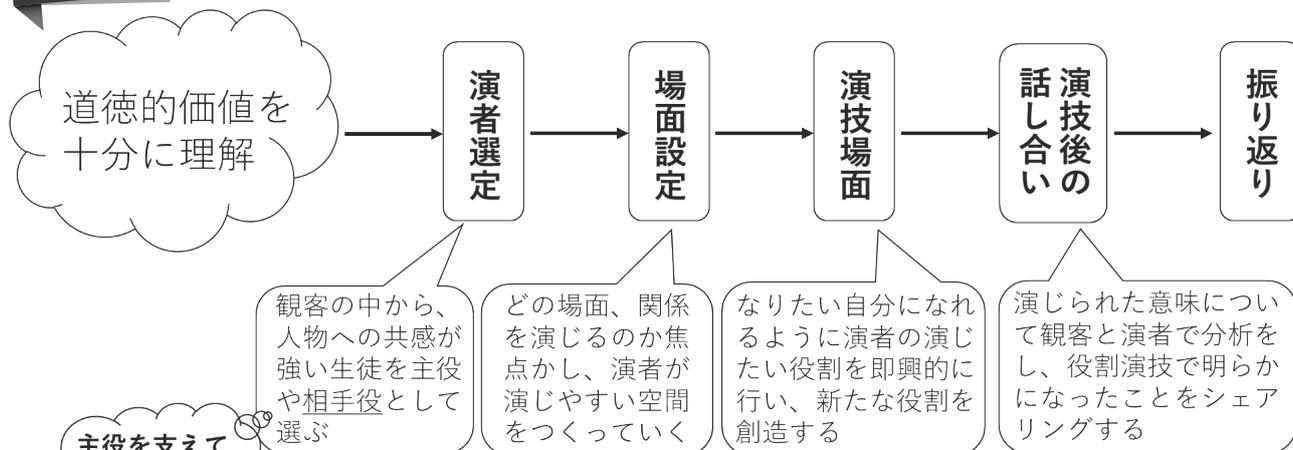
コンピテンシーを意識した授業づくり

話し合い活動などで出される多様な価値観を広く平等に扱います。役割演技でのモラルジレンマによる二つの内容項目も柔軟に扱いながら「深い学び」につなげていきます。

単元(題材)の様子

ポイント1

役割演技の全容



主役を支えてあげられる相手役が大切



役割演技中の場面



演技後の話し合い

ポイント1

ポイント2

ポイント3

深い学び(道徳性の深化)について

役割演技後の話し合いでは、演者の発言や考え方の変化などを、学級全体で共有します。観客一人一人の考え方や新たに気が付いたことなどを出し合うことで、多面的・多角的な思考の広がりが期待できます。さらに教師が生徒の発言に対して「問い返す」ことによって、発言の根拠が明確になります。同時に周囲の生徒に多様な考え方を促すことにつながります。また、内容項目(徳目)については、モラルジレンマにおける二つ以上の価値に軽重をつけず、生徒が「考える」というスキルを重視した授業に努めます。



観客



研究会

本時の展開では、ねらいを達成する手段として、役割演技を用いた授業実践を行っていきます。

本授業では生徒が教材の道徳的諸価値を十分に理解し、それについての深い思考を役割演技として体現しています。大切なのは、それを学級全体で、共有しつつそれぞれが自分のこととして考え、議論することです。また、一連の研究を通して、新たな時代の道徳科の在り方について模索していきたいです。

道徳 <新潟地区・新潟市中教研>

全学級公開授業

研究主題：「豊かなかわりを通して、よりよく生きようとする生徒の育成」～対話を通して多面的・多角的に考えながら、最適解・納得解へ向かう展開の工夫～

開催日：11月24日（木）
会場校：新潟市立白新中学校
公開：6学級

授業者：1年 橋本 千裕「題材：撮れなかった一枚の写真」
1年 笹原 佑介「題材：銀色のシャープペンシル」
2年 田澤 育江「題材：嫌われるのを恐れる気持ち」
2年 和田 卓之「題材：人って、本当は？」
3年 渡辺 一宗「題材：命の選択」
3年 丸山 郁美・藍澤まき子「題材：手品師」

指導者：新潟青陵大学 教授 中野 啓明 様



研究推進責任者
新潟市立新潟柳都中学校
堀 徹



会場校教科担当者
新潟市立白新中学校
田澤 育江

こんな深い学びの姿を目指します

教材との対話から登場人物の心情や課題に対する理解を深めます。他者との対話、学び合いを通して課題を多面的に捉え、多様な視点や考え方を共有し、学級全体で最適解を考えます。授業の終末では、最適解を踏まえた上で多角的な視点で自己との対話を行い、納得解を導き出します。これらの過程を通して道徳的判断力や実践意欲を高めていく生徒の姿を目指します。

深い学びにいたるポイント

ポイント1

対話的な学びを通して 道徳的諸価値への理解 を深め、道徳性を養う

道徳的諸価値への理解を深めるために、対話を中心とした授業を構成します。授業のねらいや学習課題に迫る手立てとして、教材（先哲）、他者、自己との対話を授業の中で効果的に位置づけます。また、対話が単なる発表の場ではなく、深い学びへと繋がるように発問や対話の方法を工夫し、道徳性を高め、よりよく生きようとする態度を養っていきます。

ポイント2

多面的・多角的な思考で深い学びへ

道徳的判断力や実践意欲を育むためには事象を多面的・多角的に考えることが大切です。自分では考えつかなかった他者の視点を取り入れ、選択肢を広げた上で自分の考えを深めていきます。

ポイント3

最適解から納得解へ

道徳の授業は合意形成の場ではないので、学習課題に対するまとめ（最適解）を行い、その後の振り返りで「自分はこう考える」という納得解を導き出すことを大切にします。

単元(題材)の様子

【①教材、先哲との対話】

まず初めに、教材との対話を行い、登場人物の言動や心情を深く読み取ります。教材の提示方法を工夫したり、生徒の日常と関連づけたりすることで、生徒が自分事として学習課題を受け止め、主体的に学びたいと思えるように導入を工夫します。

ポイント1

①教材との対話、導入の工夫



②他者との対話、対話方法の工夫



【②他者・自己との対話】

次に主発問に対して、自己や他者(仲間や教師)との対話を通して学習課題に迫っていきます。対話は手段であり目的とならないように、哲学対話やFTでじっくりと語り合ったり、思考ツール、ICTを用いて思考を可視化したり、対話方法に工夫を凝らして深い学びへと繋げていきます。

ポイント1

③多面的・多角的な思考



【③多面的・多角的な思考】

他者との対話で登場人物の行為や心情をより多くの視点から考え(多面的な思考)、思考や選択肢を広げていきます。また、他者の考えと自分の考えを比較・検討した上で自分の考えをもつこと(多角的な思考)で道徳的諸価値に対する理解をより深いものにしていきます。

ポイント2

【④最適解から納得解へ】

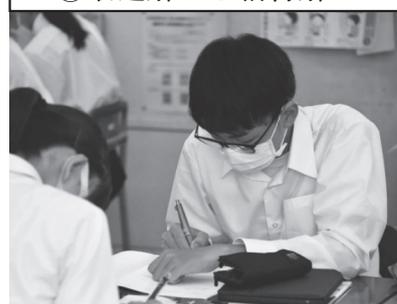
授業の終末では、学習課題に対するまとめを行います。まとめは、内容項目のねらいに対して妥当性のあるまとめ(最適解)を学級全体で行っていきます。

1時間の授業を振り返り、最適解を踏まえた上で、自己との対話を行い、納得解を導き出します。

これらの過程を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てていきます。

ポイント3

④最適解から納得解へ



研究会

研究会では6学級の授業を公開します。題材がすべて異なるため、授業展開もそれぞれ題材に合わせ、対話方法などを工夫しています。

豊かなかわりを通して、よりよく生きようとする生徒を育てるために、3つのポイントを押さえた深い学びにいたる授業を提案します。



道徳 <下越地区・五泉市・東蒲原郡中教研>

「命の選択」

研究主題：互いに認め合い，他を尊重する心の育成
～豊かな心を育む道徳教育を通して～

開催日：10月26日（水）

会場校：五泉市立川東中学校

公開：1学級

授業者：3年 高野 由紀子

指導者：下越教育事務所 学校支援第2課長 田中 一史 様



研究推進責任者
五泉市立五泉中学校
後藤 陽子



会場校教科担当者
五泉市立川東中学校
西方 貴子

こんな深い学びの姿を目指します

- ①補助発問を受けた生徒の発言に対し，授業者が問い返す中で，生徒の思考が深まる。
- ②その後の班の話し合いで，ファシリテーターによる問い返しにより，意見交換が活発に続き，個々の思考がさらに深まり整理されていく。
- ③まとめでは，テーマに対する思考が整理され，自分の生活を振り返ったり，仲間の発言を受けて考えていたりするなど，じっくりと自分の内面と向き合って考えを表出している。

この①～③の姿を目指します。

深い学びにいたるポイント

ポイント1

道徳的価値の理解を望ましい方向に変容させる中心課題を設定する

初発の自分の考えを明確にし，班や全体での対話を通して学びを深めていきます。終末場面で，主題に対しての自分の生き方についてじっくり考えを深められるような中心課題を設定します。発問の仕方で生徒の考えが広がったり，深まったりするので，広げたい発問，深めたい発問を精査し，生徒に投げかけていきます。

ポイント2

多面的・多角的に考えるための補助発問を工夫する

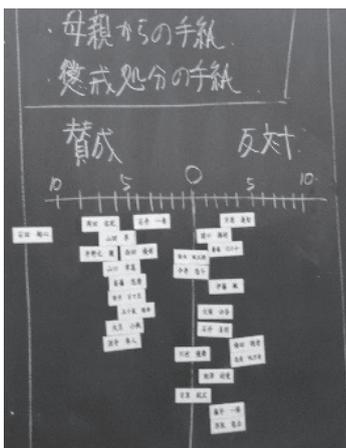
本当にそれでよいのか，もし～なら～するのか，人としてどうするべきか，など考えを深める発問を適宜投げかけ，中心課題に対して自分事として捉えていくための手立てとします。

ポイント3

積極的な議論を成立させる場面設定をする

ホワイトボードなどを使用して考えを可視化し，仲間との意見の相違に気付く場面を計画的に設定します。

単元(題材)の様子



ポイント1

初めにテーマについての自分の考えを明確にします。班での話し合いや全体での意見交換を経て、終末時に再度テーマについて考えます。生徒がたくさんの考えに触れることを大事にして、授業を展開していきます。



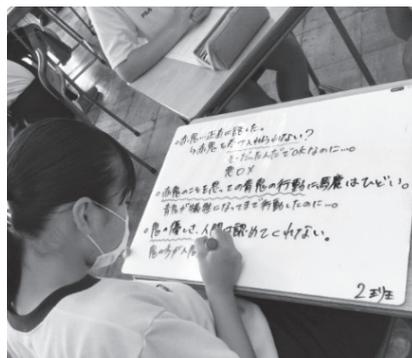
あらすじを確認しながら、中心課題に迫る補助発問を投げかけていきます。自分の考えを調整したり、自問自答したりして生徒は考えを深めていきます。

ポイント2

班の意見交流では、ホワイトボードを使用し、可視化します。文字にすることで自分の考えとの相違点に気づき、生徒同士でも問い返しが行われます。ファシリテーターがすかさず「それってどういうこと?」と問い返し、議論が始まります。仲間の意見や考えの裏にある心情や真意を青字で、おかしいと思うところは赤字で書きます。こうすることで、自分の考えとは異なる、仲間の意見が明確になり、議論を活発にして班員で考えを深めることができます。

その後、写真撮影したホワイトボードをロイロノートを使い、全体で共有することで、さらにたくさんの考えに触れます。

ポイント3



研究会

人工呼吸器をつけたくない意思表示した祖父。苦しむ祖父を楽にしてやりたいという思いから人工呼吸器をつける判断をした家族。

その判断が正しかったのかと葛藤する家族の姿から、「命」「人の死」「終末期」について考える授業を予定しています。

家族の判断が本当に正しいか、自分がその家族だったら、自分がその立場だったら、と考えれば考えるほど、悩んでしまう資料でもあるため、中心課題から反れないように補助発問を組み立て、生徒を深い思考に導くように工夫をします。